
DORAEMON ~驚異の真実~

ぬじゅわきし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DORAEMON ～驚異の真実～

【Zコード】

Z7411M

【作者名】

ぬじゅわきし

【あらすじ】

前回「ANPANMAN」でアンパンマン達の複雑な人間模様と真実を暴いた、ワタクシ、ぬじゅわきしがさらなるタブーに挑む！ドラえもんの真実とは！

注・あらかじめ「ANPANMAN」を読んでからの方がいいです。

のらたの田舎ヒューマン（前書き）

注…あらかじめ「ANPANMAN」を読んでからの方がいいです。

のびたの出生とドラえもん

代々伝わる名家、野比家で大騒動が起きた。『子息が誕生すると言うのだ。親族達は大騒ぎし、のび助と妻玉子のいる病院へ一斉に押し掛けたが、病院が迷惑だと言うので控え室でしぶしぶ待っていた。

やがて、おんぎやあ、おんぎやあ、おんあぼぎやあ、と泣き声が聞こえて来た。親族はどかどかと病室に向かつた。無事赤ん坊が産まれたのだ。皆ほっとした様子であつた。

のび助は玉子に聞いた。

「名前は何にするかい？」

「そうね……聰明でいられるよう、悟くんつてのはどう？」

「野比悟……駄目だよ、ウチは先祖代々名前^{たま}の頭は『のび』なんだ。のび太にしよう。」

「のびたあ？」

玉子は子につけるにはあまりにセンスが悪すぎると感じて思つた。あなたみたいなのび助ならまだいいけど、のび太だと変に連想するものが多いじゃない、伸びた延びたエビータ……

だが親戚も口々に「のび太にしよう！」「のび太だ！」「元気によくすくのびのび太！」と叫んだ。もはや「悟」にしよう、と言う者は玉子の他になかった。皆が口々に言つので、いつの間にか赤ん坊の名は「のび太」に決まつたような感になつていた。その波に玉子は抗えなかつた。

名前を強引に決められた事で一つの弊害が生じた。玉子はのび太に愛情が持てなかつた。毎日「のび太、のび太」と呼びかけるのが彼女にとって苦痛でしからなかつた。のび太……なんて間抜けな名前、代わりに「悟、悟」と言えればよかつたのに。そう思つと玉子は涙

がぽろぽろこぼれ落ちた。

やがて愛情欠乏は虐待に発展し、のび太に苦難の人生が始まった。身体虚弱な彼は学校からも家から苛められた。唯一の救いは父ののび助であった。

身体虚弱と言つてものび太は瘦せていた訳ではない。彼は色白で小太りであった。母に隠れて布団の中で漫画を読みすぎたため、たちまち目が悪くなり、ビン底のようなメガネをかけていた。母はそんな彼の姿に近親憎悪を抱いた。彼女もメガネをかけていたからだ。ま、いや、あの子、私に似てきたわ、いやだわ、と徐々に嫌悪感を募らし、いつしか褒める事を忘れていた。

そんな訳で自信を失つたのび太は成績を悪くする一方であった。もはや勉強さえも身に入らず、0点ばかり取っていた。だが先生も気にするばかりか、叱つてばかりいた。

そんなこんなでのび太は高校生になつた。

彼はすっかり心がひねくり返つて、人型の板に誰かの名前を書いて工アガンで倒すという不気味な趣味にはまりだした。そのうち彼は射撃が上手くなつた。

そんなのび太だがある日の事……。

嫌嫌勉強をした時に、引き出しが突然開いたのである。

そして信じられない事に引き出しから何者かが這い上がってきた。

「なななななんだこりや！」

引き出しから現れたのはおっさんであった。青ざめていて、丸い眼鏡を掛けていた。口は異常に大きく、にやりと頬まで裂けた笑いをした。おっさんは上半身裸でジーパンを履いていて、筋肉質な腹部には手術痕のような裂目があった。

おっさんはしわがれ声で自己紹介した。

「ぼく、ドラえもんです。」

出会い

「だ、だ、誰ですか！」

のび太が言つと彼はにんまりと笑いながら極限のしわがれ声で答えた。

「ぼく怒裸衛門ノーランモモンです。名字は鈴木。」

鈴木怒裸衛門。聞いた事もない。のび太は尋ねた。

「…どうやつて机から…」

「未来から空間がつながつて、いつの間にか辿り着いた。ここはどこだ。住まわせておくれ。」

「冗談じゃない！帰つて下せー！」

そつ言つと怒裸衛門は突然凄まじい形相で泣き出した。

「いやじゃああああ、異空間に迷つてわしには帰る家がないんじやああああ、おねがいじゃああああ！」

「駄目だ！GET OUT！」

のび太がそつ言つと怒裸衛門は涙を拭つて腹の傷の中に手を突つ込んだ。あまりのおぞましさにのび太は身震いした。

「な…なにを…」

そして中から玩具のような銃を出したので更に驚いた。なんだあの傷痕は。怒裸衛門は銃をのび太に向けて言つた。

「住ませないと、殺す。」

のび太はせせら笑いながら言った。

「ちょっと、冷静に考えましょう怒裸衛門さん。 そんなチャチな脅しには引っかかりませんよ。 所詮偽物でしょう。」

すると怒裸衛門はいつたん床に向けて銃を撃つた。

ビショーン、ズガガーン！

爆発して床に穴が開いた。

「何してんですか！ 弁償してください…」

のび太が叫んだ時、怒裸衛門の銃がのび太に向いた。 怒裸衛門は言った。

「よからう。 だが、住まわせておくれ。」

「こうなつては仕方がない。 のび太は頷いた。」

とその時、騒ぎを聞き付けて母のたま子が来た。 そして田の前に立つていてる上半身裸のジーパンの筋肉質なおっさんを見て悲鳴を上げた。

「きやあああああー誰ええー！」

かくして家族会議を始めたが、のび太の話があまりに常軌を逸脱しているため、両親は理解できていままでいた。 とにかくはつきりしていたのは、鈴木怒裸衛門と言う男か、のび太にとつて不本意にも、

部屋に侵入された事であった。だが追い出すのも近所の目があるし、銃を取りあげたとは言え彼が安全である保証は全く無かつた。

結局、怒裸衛門はのび太の部屋のすぐ隣、“戸棚”と称した薄暗い部屋に監禁されていた。そこはネズミがうろちょろと這い回る不潔な部屋であった。毎回視界に映り、体を歩き回るネズミは怒裸衛門を何度も一時的な発狂へと誘い、次第にトラウマを形成していった

のび太が面会に来た時には怒裸衛門はすっかり大人しくなったが、にへらにへらと笑っていた。そして言った。

「ああ…餡子がほしい…餡子がほしいよお…」

「餡子?」

「なんでもいい、甘いものをおくれ…」

のび太は周りの人と目配せしたが、大丈夫だろう、との事で、台所に向かった。冷蔵庫にはどら焼きが置いてあった。とりあえずそれを怒裸衛門に与えると彼は貪るようにどら焼きを食べた。

「ううう…もつとくれ、もつと…」

以来彼はどら焼き依存症になつた。毎日毎日どら焼きを貪り、食べない日には禁断症状が現れ、全身が苦しみ、「どら焼き…どら焼き…」とうめくようになり、小さな小人達が剣を持つて自分を襲う幻覚が見え、その晩ネズミに食い殺される夢を見て「がああああ」と吠えたける有り様であつた。

彼がどら焼きをそこまで依存するようになつたのは、実は壮大な訳があるのであるのだが、あとで鈴木怒裸衛門本人が話す事になろうと思われる所以で割愛する。

パンッ。

怒裸衛門が監禁されてる間、のび太は相変わらず自室で呪いの射撃ごっこをしていた。人形を立てて、人形に憎いクラスメイト「郷たけし」「骨川スネ夫」の名前を書いては撃っていた。いまや小さな人形の額すら見事に撃ち抜く腕前となつた。

その内のび太はより過激な物を求めるようになった。人形なんてたかが物体の破壊など物足りない、ださい、情けない、ただの自己満、餓鬼の為す業だ。しかし僕は餓鬼じやない、もう大人だ。だから命ある物を狙いたい。もう誰かに痛い目にあわさないと満足できない年頃じやないか。

ある時からのび太は窓を開けて、木や道路にいる小動物を狙うようになった。しかし動かぬ板に比べ、外界に敏感な動物たちにはなかなか命中しない。のび太は苛々し、その苛々の試練の日々は続く。のび太はこの頃からゲームに依存し始めたが、一般的の正常な使用法と異なり、完全プレイヤーに感情移入していく、現実と仮想が結合していた。自分意外は敵なんだ、ふんじやえ、たおしちゃえと思うようになつた。

そしてとうとうのび太自身が変化した。ある日、木刀を購入しては振り回して悦に浸つたりしたし、人と会うと、脳天首筋手首みぞおち等、人間の幾つかある急所をつい気になつてチラチラ見てしまうようになつた。そうしてのび太の狂気は増す一方であつた：

芽生えた友情と仕掛けられた陰謀

ついにのび太は、エアスナイパーライフルで人を狙うようになった。だが発射の勇気は出なかつた。畜生、ろくに人殺しもできないなんて、僕は餓鬼だなどのび太は思つていた。学校では何もできない。彼は相変わらず虐められていた。いつもジャイアンこと、郷たけしに殴られ、お金を奪われるのだ。しかし、母のたま子は、のび太にいかなる癌ができようと無視していた。それが母の、親戚への仕打ちなのだ。

のび太はエアライフルをしまつてからしばらく空を見つめた。部屋の中は静かだ。以前は隣の怒裸衛門の悲鳴がうるさかつたが、ネズミ駆除剤を仕掛けたら静かになつたのだ。

ふとのび太は鈴木怒裸衛門が、自分は未来から来たと話した事を思い出した。もしかしたら本当かもしれない。だつてあの銃。弾丸も使わないのですごい威力だ。

のび太は“戸棚”的ふすまを開けて尋ねた。

「怒裸衛門、怒裸衛門。」

「なんじゃ、どら焼きか?」

「いや、違う。君は未来から来たんだつて?」

「そうだ…ようやく信じるよになつたか。」

「君は未来の何なのさ。」

「未来の?ロボットだよ。」

「えええ!」

信じられない思いであつた。こんなデザイン性に欠けるロボットがあつてたまるか。

怒裸衛門は話した。

「わしは元々ネコ型になるつもりだった。だが、設計のミスでネコ耳が無くなってしまった。それでこの姿になってしまった。」

「その、腹の傷は収納スペースなのかい？」

「そうだ。四次元空間になつていてなんでも収納できる。」

「なんか収納してるのが？」

「勿論、見たいか？」

「うん。」

すると怒裸衛門は裂けた腹の中に両手を入れ、手術のように腹部をぐちゃぐちゃとまさぐった。そして何か懷中電灯のような物を取り出すと、突然怒裸衛門はそれを天に掲げながら相撲の行司みたいに叫んだ。

「スマウル・ライトオオ」

不可解な沈黙。怒裸衛門は言った。

「すまぬ、セキュリティ機能かなんかで、何か取り出したら大声で名前を上げてしまう癖があるんじや。」

「うん…分かった。で、何これ？」

「物体に光を当てる時物体が小さくなる。」

「へえええ、貸してよ。」

「だめだ。まだ試作段階…」

「いいじゃんか。」

のび太は強引に奪つて、床に落ちてる〇点のテスト用紙に向かってライトを当てた。

バギギギギギ。

〇点のテストはもちろん、光を当てられた床ももろとも縮小されて周りから引き裂かれ、床に大穴が開いた。空気も縮小したため真空空間が出来て、部屋中が乱氣流となつたので風が吹き荒れ、めちゃめちゃになつた。

「あああ！」

「ほら言わんこいつちやない。今のところ、一つの対象だけを小さくするには不可能なんじや。」

「なんだそりや。」

「これでも改良された方じやよ。当初は光の当たつた部分だけを小さくするものじやつたが、そうなると表面しか効き目がなくてな、人体実験した所、被験者が皮膚だけ縮んだんで大変な事になつた。くわばらくわばら…そこである程度の透過性をつけたが、まあどちらにしろこの有り様じや。まあ逆の作用の、ビッグライトを使わんでよかつた。あっちの方が益々收拾つかなくなる。」

「え？ どうなるの？」

「結局はライトの当たる部分だけ大きくなるのじやろ。これも人体実験したんじやが、被験者は最初まともに巨大化した。が、そのうち、下半身、そして足だけが異常に巨大化して奇怪な姿形になりおつた。今も元に戻れないまま苦しんでおる。おまけに地面の一部分がが巨大化したために周りの地面に圧力がかかり、地殻変動が起きて、大地震になつた。」

「…！」

のび太は呆れて物が言え無かつた。未来はどうなつていいんだ。とりあえず次に言つてみた。

「他の、道具は？」

「おおお、ある。」

怒裸衛門は腹から巨大なドアを引っ張り出して再び宣言した。

「どこでもドアアアアア！」

「何これ？」

「思いの場所に辿り着けるドアだ。」

「へええ、便利じやん。」

「だが、なるべく使わん方が無難じやな。」

「なんで？」

「空間と空間を繋げて移動させる仕組みだが、移動中にエラーを起こしたり電池が切れたりすると、シャットアウトされる。運が悪いと、体の前半分と後ろ半分が…」

「あ、なるほど。」

のび太はこの先の展開を予想して話題を変えようとしたが怒裸衛門は続けた。

「スパアアンと一刀両断。」

「何でそこで言うんだよ！」

「ははは、怖いか？」

「…………怖くない。で、他には？」

「まあ、いろいろあるが、やはり、一番頼りになるのは…」

怒裸衛門は腹の傷から何かを取り出し、床に置いて言った。

「これじゃよ。」

それは銃だった。怒裸衛門は語る。

「こいつは正しく扱えば決して裏切らねえ。身を助け、人を説得させればピカイチじや。良い銃ほど良い働きをする。これはアメリカで使われてるライフルでな。オートマチックだから6発まで装填不要じや。だから外しても大丈夫。何人もやれる。」

のび太は感動した。怒裸衛門は自分の思想の共鳴者、いや自分の師だ！のび太と怒裸衛門は仲良くなり、共に笑いあつた。二人は飛び回っているハ工型のカメラに気付かなかつた。

*

時は変わつて遙か未来。時空無線対応のハ工型カメラが送信した、怒裸衛門とのび太が笑いあつてゐる光景を見て、覆面を付けた作業員が不安氣に言つた。

「セワシ様、大丈夫でしょうか…仲良くなつては彼の例の任務が…」

するとある男が自信満々に言つた。

「大丈夫、時が来れば、怒裸衛門に“覚醒プログラム”が打ち込まれる。されば必ずよくやつてくれる筈だ。」

そう言つて男はわははははと笑つていた。

この男はもちろん先ほどの「セワシ」と言つあだ名の男である。元々パン屋だつた彼はあるあだ名があつたが、バイオ機械の職業に転職してから、配慮の良さから「世話師」…「セワシ」のあだ名がついた。勿論それは彼の本名ではない。

「セワシ」は思う。かつて奪つたあの技術と自分のあの技術を組み合わせれば最強の人造人間が作れる。怒裸衛門はその意図で作りあげた。以前の試作品達は強度に欠ける難があつたが、ホーラーマンの骨格を応用すれば「ANCO」を最大限に發揮できる新モデルができるではないか。あの真鍋つて奴はそれが目的だつたのだな。ふは、ふははははははは。

彼は高らかに笑い続けた。彼の名は飯綱秀和。「セワシ」の以前のあだ名は「ジャムおじさん」だつた。ちなみに怒裸衛門は、実はしょくぱんまんを改造した物であつた。

続
く。

萌生えた友情と仕掛けられた陰謀（後書き）

以前書いた「ANPANMAN」を読まないと意味が分からぬ
い
も
で
す。
<http://ncode.syosetu.com/n6457m/>

「心の友」グループ

すっかり怒裸衛門とのび太は仲良くなつた。学校でも一緒に語りあつた。周りは上半身裸のジーパン男に不審がつたが、そんな事はお構い無しだ。

「おい。最近のび太うざくねえか?」

と郷たけしはスネ夫含む不良グループに言つた。皆は口々に同意した。

「そうだそうだ。あの鈴木ナント力衛門とか言つじじいとつるんだから、調子に乗り始めた。」

「くそおおお、この前かつあげしようとしたら、逆にかつあげされたあああ」

スネ夫が叫ぶと不良ボスのジャイアンこと郷たけしが言つた。

「それはお前が悪い、スネ夫。だが、確かに対処せねばならぬ。スネ夫、貴様の名誉をはらすためにも何かいい案はないか?」

「ははあ、ありがてえ。一つあります。」

「なんだ?」

「のび太の野郎は、源の静香様に惚れていまつせ。」

すると、すっかり不良娘と化した源静香がやさぐれた感じで言つた。「なになになに? 私を使えってえの?」

スネ夫はたじたじと答えた。

「いえ、使うのではなく、お役に立てて頂けたらと。」

「要するに使うって事でしょ。まあいいわ。どうすればいいの?」

「簡単です。のび太は貴方には無防備ですから、そうですね、告白のシチュエーションでメールするのです。」

「メール? アドレス知らないんだけど。」

「じゃあ、のび太m i x e入つてるからそこからメッセ。」

「ミーティングは？」

「『面会』？」

「変な名ね。」

「見つけた？」

「うん…わ、紹介文、マイミクやマイミク外の悪口ばつか、日記も「メント132もあつてほとんど荒らされてる…なんか、すごい不気味な気持悪い心情日記書いてるからかな。」

「だめだなメッセ送つても荒らしか怪しい勧誘と思われて無視される。」

「じゃあどうすればいいの？」

「単純だ。のび太の机に紙を入れるしかない。」

「…そうか、文面どうしようか…」

スネ夫はよく来たと、自らの策士としての腕前を発揮した。

「では…告白は本来は真剣な話ですから、真剣味を伝えるために簡潔かつ用件を明確に書く事が重要で、余計な“はぐらかし”は禁物です。ですから文面ははつきりします。某時に公園に来て…これだけで良いです。」

「でも告白と分かりづらいのでは…」

「いや、このような、ある乱暴な簡潔さがすなわち禁忌である告白の一コアンスになっています。さらにこの一コアンスを加速しますよ。速記でやや雑に書くのです。これで、あなたに今すぐ会って言いたいけど、人目があるから、とにかく絶対来て、と言ひ懸命さが伝わるのです。」

「相手がのび太と考えるとゾッとするわね。」

「とにかくまあ、これで告白らしい感じは伝わります。場所は、うん、告白にふさわしいあの土管のある空き地がいいですな。雷じじいは自分以外の事には一切関わらないし、誰も興味がない。しかも…告白にふさわしい、と言ひ事はリンクするにもふさわしい。

「郷たけしは嬉しさのあまり叫んだ。

「いえい！さすが、わが『心の友』グループの戦略担当だな。悪魔みてえだ。頭がいい。」

「いえいえ、出来杉に比べれば至らぬもので…」

「ふん、出来杉なんか、せっかくの知恵を自分のおべんきょうのためにしか使ってない、勿体無いやつだ。よし、静香！今から書け！」

「え？でも…たけしの前では…」

郷たけしを前に静香は戸惑つた。だが郷は言つ。

「いいだろ？それは所詮、嘘の恋文だ。書こうが書かまいが、お前は俺の女だ。」

郷たけしは、郷ひろみの生まれ変わりと噂されるほどに、不良の中でも異例のカリスマ性を持つていた。何人かはあいつは歌が下手だと言つていたが、嫉妬によるものであろう。

そんな彼がのび太に対して危機感を抱いていたのは、のび太もカリスマ性があるからだ。そこまで憎まれるにはそれなりの何かがないとできない。郷たけしが正のカリスマとすればのび太は負のカリスマ。もしかしたらのび太に何か起きればたちまちたけしは地味な人間に陥る。そんな状況が耐えられなかつた。

空き地には静香が立つていたが、土管の裏や中には不良団が隠れていた。準備はできている。後はのび太が約束通り来ればいい。

しばらく待つて、のび太は来た。にへらにへらと笑いながら来た。やつは一人だ。怒裸衛門はいない。チャンスだ。郷は密やかに笑う。

戦い

空き地にのび太は来た。静香はスネ夫に指導された通りに、空き地の中央に立っていた。前章にも書いた通り、横倒しになつた三本の土管の裏に不良たちが隠れていた。

静香はのび太に接近して言った。

「待つてたわ、実は私ね・・・」

「どけ。」

のび太がいつになく怖い口調で言ったため、静香は危険を察して逃げた。その途端のび太は腹からライフルを取出して撃つた。

「ずがーん、ずがーん、ずがーん…

*

「僕ら友達。」

「わしら友達。」

これより前の話、怒裸衛門とのび太はそう言って友情を確かめあつていた。

そしてある時怒裸衛門が話を切り出した。

「なあ、のび太、友情の証として、スペアポケットをもたねえか?」

「スペアポケット?」

「わしの四次元ポケットの空間に直結するポケットじや。」

「え! いいの?」

「勿論。友達だろ?」

「うん…じゃあ…」

すると怒裸衛門は鋭利なナイフを取り出し、腹に突き刺した。

「「ふうう…」

そしてゆっくりナイフを動かし、腹に刻んでいった。のび太の腹には怒裸衛門と同じ斜めの傷痕ができた……

*

…ずがーん、ずがーん。

その、のび太のスペアポケットから出たライフルで一番前の土管を打ち抜いた。土管からは悲鳴が微かに洩れ、何人か手負いの不良が逃げ出したが、のび太は容赦なく銃弾を放った。
ずがーん、ずがーん、ずがーん。

「おまえらが罠を張つていた事はとっくにお見通しだ。どうだ？ 堪忍して出てこい…」

のび太が言つと土管の裏から郷たけしが飛び出してマシンガンですばばばばと撃つてきた。幸い命中しなかつたのび太は弾切れのライフルを捨て、拳銃を腹から取り出してばひゅんばひゅんばひゅんと撃つが、郷たけしは信じられぬ身のこなしで銃弾から避けた。そして郷たけしは空中に飛んでのび太の拳銃を蹴り落とした。

「ぬほつ…！」

かくしてたけしとのび太のカンフーの戦いが繰り広げられた。身体虛弱ののび太にはとうてい勝ち目はないはずだが、怒裸衛門くれた軍事用麻薬のおかげでかつてない力を發揮していた。だが、薬が切れかけている事に気付く。まずい…。

「ぎああああ…！」

たけしが突如悲鳴を上げて後退りした。のび太は気になつて尋ねた。

「どうした？郷。」

「は、はら、お前の腹！」

見るとのび太も驚いた。のび太のスペアポケットから怒裸衛門の顔が飛び出していたのだ。

「怒裸衛門！」

「スペアポケット友情の証。ここにはわしに任せへ。」

そして怒裸衛門はのび太から飛び出した。

…(+)で一つ謎が生まれるが、怒裸衛門はどうやって自分のポケットに入つてのび太のポケットに出たのか。上半身までならなんとかいいのだが、上半身を突破すると、ポケットより下の下半身は入れるには困難な上、ましてや入り口にあたる腹部の脱出は不可能である。したがつて合理的には腹部のポケットの口からポケット内部に入ればいいが、骨の問題を抜きにして怒裸衛門を袋とみなして考えれば彼は表裏ひっくり返つて、とんでもない姿を地上に晒す事になる。従つてこの問題は永久に不明である。

怒裸衛門は信じられない程の素早さで不良どもをなぎたおした。だがどんどん不良たちが現われた。なかなか人数は減らない。怒裸衛門は突然食パンをのび太に与えた。のび太は尋ねた。

「これは…？」

「暗記パンだ。飯綱発明。書かれた内容を深層意識に刻み込んで覚える、受験対策キット。だが、最近判明したところ、意味不明な事を書いて食べさせると混乱して発狂するらしい。襲われたら食わせろ。」

そつ言つて怒裸衛門は、のび太の元を離れ、不良どもと戦つていた。暗記パンには「お魚が背伸びして首の向こうまでピンポンパンの魚虫によるぐーらぐりがコブンコブン」などと意味の分からぬこと

が書かれていた。のび太の元に屈強な不良が襲い掛かつた。のび太はすぐさまパンを不良の口に押し込んだ。不良はたちまち襲うことをやめていひやひやひやひやと笑い、突然踊りだして不気味な歌を歌いながら空き地の外へ行つた。

怒裸衛門の方は、銃を駆使して次々と不良どもをなぎ倒し（！）た。
そしてとうとう意識のあるものは静香だけになつた。

のび太は憎しみをこめて静香に言った。

「君のやうに……オレを利用するとは、なんとあへど、君の、やうに、うがあああああ……！」

そういうてのび太は暗記パンを持つて静香に接近したが、なぜか怒裸衛門に襟首を掴まれて放り投げられた。

「いてって、なにすんだよつ怒裸衛門！」

「女子供は傷つけちゃなんねえ・・・」

その時静香はハツとした。この人は・・・まさか・・・。

だが、突然怒裸衛門は苦しみ始めた。

傍にハエが飛んでいた。

*

ハ工型機械から移されたモニターには怒裸衛門が苦しみ呻いていた。

「そろそろタイマーが作動したか。」

「おそらく。」

手下の報告を聞いて、飯綱＝セワシはにんまりと笑つて言った。

「ではわれわれも怒裸衛門のもとへ行くか。」

そして眞実へ（前書き）

【注】コレ以前に書いた作品「ANPANMAN」驚異の眞実へ」を
読まないと意味が分かりませんw

そして眞実へ

と叫び呻く怒裸衛門。のび太は、どうしたのだろうと不安になつた。これまで彼に異変はなかつた。ではいつたいどういうことなのか。

怒裸衛門は突然黙りこくった。どうしたのだろう。異変が収まつたのだろうか・・・

突如怒裸衛門はのび太をじつと見つめた。なぜか恐怖に怯えた目つきであった。怒裸衛門は何かと激しく葛藤していて、やがてそれは眩きにまで発展した。

「・・・コロス・・・ダメ・・・コロス・・・ダメ・・・コロス・
・ダメ・・・ダメ・・・ダメ・・・ダメ・・・コロス・・・コロス
コロス殺すうううう！――！」

突然怒裸衛門は叫んでのひ太に襲し掛けた。

「どうしてだよ怒裸衛門！ どうしてー！」

「目を覚まして！僕ら友達だろ！」

セワシ飯綱は土管の裏側からこの光景を見てほくそ笑んでいた。そう。スライネットという会社に就いていた飯綱は、ついに気が狂つて、真鍋の先祖を殺そうと決意した。そのために作られた抹殺者＝ターミネーターが怒裸衛門なのだ。

すべては仕組まれていた。怒裸衛門はのび太と友達になるよつプロ
グラムされ、やがて時間が経つとのび太を殺せという命令が下る。
飯綱の計算では怒裸衛門は人間の二倍の力を有するため、反撃され

て負ける可能性はないはずである。

いまや白目をむいて襲い掛かる怒裸衛門。のび太はひたすら逃げていた。親しい友達に銃を向けたくないが、ここは仕方ない。のび太は怒裸衛門の足に向けて一発打った。

バアーン！――！

ところがまったく効果はない。そうだ怒裸衛門はロボットだと今更ながらのび太は気づいた。

そしてひたすら逃げる。隠れようにも隠れる場所がない。土管には死体が累積している。ちくしょう・・・どうすれば・・・。

その時目の前に郷たけしが現れた。そして怒裸衛門に突進した。

「ジャイアン！――！」

「逃げる・・・のび太・・・おめえは静香に免じて許してやる・・・だから・・・はやく逃げ、ぐはあ」

いとも簡単に屈強な郷たけしをなぎ倒し、怒裸衛門は再びのび太を追いかけた。

そしてとうとう追い詰められる。全身を押さえつけられたのび太は必死にもがくが怒裸衛門の力には抗えない。そこでのび太は最後の抵抗を試みた。

「やめろ！怒裸衛門。僕たち友達だろ！」

そして服をまくつて、のび太は自分の腹に刻み付けられたスペアポケットを見せた。
すると怒裸衛門は「トモダチ・・・・」と呟いて、抑える力を弱めた。

セワシ飯綱はむしゃくしゃした。

「なんだ、くそ、感情が芽生えやがって。ちくしょー！」

リモコンを押した。

たちまち怒裸衛門は「がああああ！」と苦しんで再びのび太を襲おうとする。もうだめなのか、とのび太はあきらめようとした。

そのとき静香が叫んだ。

「やめて！ しょくぱんまん！」

その時、怒裸衛門の動きが止まった。そして怒裸衛門の脳裏にこれまでの記憶がよみがえった。

*

自分はかつて演劇や歌などに優れた、才氣溢れたしょくぱんまんであつた。しかしながらどう。アンパンマンに体はいらない、顔だけを大量に量産して飛ばせばいい、ヒジャムおじさん飯綱が結論したとき、何かが変わつた。ロールパンナは発狂し、人造人間たちはもはやパトロールには不要になり、ひたすらパン屋に従業していた。そのパン屋を閉じたとき、このままでは自分は終わりだと追い詰められ、ジャムおじさん飯綱に必死に懇願した。

「お願ひします！ どうか、私を見捨てないでください！」

「君たちは、もう用済みなのだよ。パンの『』とき弱い生命体で何ができるよ。たしかに再生力はあるが、今はそんな時代じゃないのよ。見る。」

飯綱が指差した先には、「飯綱発明」と称したホーラーマンたちがずんどこずんどこ歩いていた。

「今は『ホーラーマン』の時代だ。お前のような弱者には用はない。」

「しかし、ジャムおじさん!」

「おつと、今は私はジャムおじさんではない。セワシってあだなのだよ。これから私を呼ぶときはセワシ様と呼べ。」

「・・・・・・ 分かりました、セワシ様。」

ふとしょくぱんまんはアイデアが思いついた。

「では、わたしを改造して新しいロボットを作つてください。『A NEO』を使ってもかまわないです!」

飯綱はにやりと笑つた。

*

すべての記憶がよみがえり、怒裸衛門は正気に立ち返り、殺人プログラムが阻止された。そして静香を見た。怒裸衛門は驚愕した。

「おまえは・・・・・」

「ちくしょう!・・・・・」

飯綱は叫んだ。

「くそ、役立たずのパンめが! 私がのび太を始末する!」

そして銃を持ち出してのび太に向けた・・・

その時、ブオオンブオオンといつ音が響き、空間に穴が開いて白バイが大量に到着した。なんだ?と飯綱が振り返ると彼は驚愕した。

「タイムパトロール!!!!」

そして白バイの先頭からヘルメットをかぶつてスーツを着た男が降りた。その男がヘルメットを脱いだ。その顔は輝くようなイケメンであった。

「真鍋!!!!」

そう、かつてはバイキンマンと名乗っていた真鍋リチャード。たしか殺したはずなのに、ジャムおじさん飯綱は混乱した。

真鍋は言った。

「飯綱秀和!貴様を逮捕する!大量の殺人や、横領、剽窃の疑いでだ!」

「なぬ?どうして・・・・」

「オレは生き延びた。そして、このことを予期して事前にスパイを送り込んだのだ。」

静香が手を上げた。飯綱は叫んだ。

「おまえは!」

「そうだ、わが妻のドキンちゃんだ。町中の皆に記憶を植え付けて、ずっと見張っていた。」

「そんな・・・・」

「もう、貴様はこれ以上の悪行ができないよつこしてやる。はーはははは、はつひふつへほー!!!!」

そして真鍋は飯綱に手錠をかけてバイクに縛った。

「静香＝ドキンちゃんも行きそうだったので、のび太は言った。

「え・・・行つちゃうのかい？」

「そうよ。でも安心して。あなたの子孫と結婚するのだから。」

真鍋は微笑んだ。

「大丈夫じゃない。あなたにはいい友達がいるわ。」

のび太は振り返った。怒裸衛門がニヤニヤと笑つてこちらを見つめていた。

「そうだね・・・」

「じゃあ、さよなら・・・」

そしてバイクは行く。のび太はだんだんと涙が溢れて泣き出した。怒裸衛門が慰める。この感動的なラストシーンを背景に、エンディングテーマが流れる・・・

アッタマデツカツデーカ、さーえてぴつかっぴーか、そーれがど
ーうーしーーたー、ぼく怒裸衛門ー・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7411m/>

DORAEMON ~驚異の真実~

2010年10月12日08時19分発行